

(表紙)

(朱筆)
「明治

六号」

海舟日記13

(ラベル)

海舟日記
第十一号

従明治七年正月廿一日到于

八年五月十四日

日記

(見返し)

駿河台西紅梅丁四番地⁽¹⁾ 村田氏寿元林有造邸
本郷丸山町十九番地岡田⁽²⁾ 蠣殻丁二丁目
六番地嘉納⁽³⁾

- 事 立 族 家
- (1) もと高知県参
士佐立志社を設
- (2) 岡田斧吉の遺
- (3) 嘉納次郎作

明治七年一月廿一日

伊藤^(重)少将、榎本⁽¹⁾中将被 仰付、省論云々

内話 甚太郎⁽²⁾ 人見・藤沼 山岡氏

廿二日

三条殿江辞表差出、午後参官、段々

御説諭有之 中尾捨吉⁽³⁾、山田少将の儀ニ付建言草稿差出

廿三日

溝八十郎⁽⁵⁾ 吉田清行⁽⁶⁾、台湾行之

事申聞 昨日有馬純武同人受合

之旨申聞 遠武秀行、榎本之

事ニ付論説之顛末申聞

廿四日 参

遠武、小倉之事并吉田清貫之事

申談 大石江一封遣す 岡田斐⁽⁸⁾

(1) 榎本武揚（一月十四日海軍中将、同月十八日駐露特命全權公使となる）
(2) 出島竹斎（静岡県有渡郡小鹿村名主）

(3) 陸軍少佐
(4) 山田顕義（二月十二日駐清公使を免ぜらる）

(5) 溝口勝如
(6) 海軍裁判中主理 二月八日海軍大尉となる

(7) 海軍主計少監

(8) 岡田斐雄（旧庄内藩士）

大隈氏江一封認遣す

廿五日 参官 平田成之助、海軍江召仕れ

度旨申聞

廿六日

津田真一郎 村田巳三郎 甚太郎、国立銀行

不承知之旨并見込申聞る 岡田斐、大隈氏

江参り候旨申聞 甚太郎江御向之質地証文

写相渡す 児玉利国外一人、台湾の見込

并御所置不定ニ付出立出来難キ旨也

長谷川貞雄、省之額金遣払表并自身

進退之事申聞

廿七日 参

廿八日 〃

廿九日 〃

真田大丞、省用談シ済、鹿児島製鉄所

并本部江伊集院心得として入れ候事、赤松⁽¹⁰⁾

(9) 成富清風(旧佐賀藩士 一月十二日台湾出張を命ぜらる)

(10) 赤松則良(一月十一日帰国、二月三日主船頭兼任を免ぜらる)

事船頭兼御免願等也

三十日

三十一日 参、出省

太輔之宣旨坊城氏⁽¹⁾受取 クラク⁽²⁾

氏⁽¹⁾来二三日之両日之内招キ手紙来ル

二月一日

山内国雄江村田氏江之招介認遣す 高畠⁽³⁾

五郎 福田江地所頼ミ手紙認遣

永峯、千五百両地所附金ニいたし可申談す、

御靈屋向并東照宮御修覆之事談

榎本六介壹万両返却、直ニ御向江納む

二日 参

高畠⁽¹⁾ 佐々倉⁽²⁾ 今二百五十両返却

三日 参并出省

磐前県大属両人、当今之乱勢を申聞る

(1) 坊城俊政(式部頭)

(2) クラーク

(3) 高畠眉山(二月八日海軍秘書官となる)

長谷川貞雄・有馬⁽⁴⁾、建言持参 小倉

四日 ヌ ヌ

小倉忠正「磐前県大属兩人

五日 出省并参朝 中牟田 栗本

六日 遠武 榎本其他

岩倉集会、台湾之評議有之

七日 所劳引

馬車并乘馬税之事申来る

八日

品海之諸艦巡覽

九日 参 出省

徳田、海兵之事ニ付建言書持参

肥田浜五郎

十日 参 出省

吉井宮内少輔之悴器械所江入之

(4) 有馬純武

手続申談

十一日 参宮^(ママ)

夜中糸公江参上、佐賀県盲動之信

有之 赤松大丞江使遣す

十二日 参、出省

大坂丸・雲揚艦出船之事申談 榎本釜

二郎、副島氏江魯之事談候旨申聞

高島江使遣す

十三日 参、出

林、九州出張申立 大坂丸器械損所之事、

大久保江申遣⁽¹⁾ 龍驤艦出船之事伊東江談

○杉浦讓江松平太郎并稲垣・臼井之事頼遣⁽²⁾

唯武連暇乞、遠武江伝言申遣⁽³⁾⁽⁴⁾

十四日 参、出省^{大六} 玉忠金子借用之事申聞

十五日 〃 〃

(1) 大久保利通(佐賀の乱征討のため二月十四日東京を發す)か

(2) 内務大丞兼戸籍頭地理頭 もと静岡学問所四等教授

(3) 海軍秘書官

佐賀の乱に出征

(4) 遠武秀行(二月九日佐賀の乱に出征)

熊谷県
平民
西野
省三
五両遣す

艦隊指揮并筑波艦長分建言、⁽⁵⁾小倉
少尉、条公御直奏之旨申聞

十六日

深山宇平太、村田江招介認遣す⁽⁷⁾

大久保一翁、条公御談之末内話、

口上書預置

大六、式万両借遣す、内三千両別

口なり 鳴鷺江火事見舞

十七日 参

佐賀県にて昨日熊本鎮台兵と取合之

電報有之 一翁之申聞候ケ条、三条

殿并木戸氏江内話⁽⁸⁾ 伊東指揮筑波⁽⁹⁾

艦長之建言上達

十八日 出省 大野已下六名九州江遣

鎮台兵敗北之報あり、十六日電報

(5) 伊藤雋吉(海軍中佐)

(6) 小倉信近

(7) 旧静岡藩郡政掛宿駅掛

(8) 木戸孝允(参議兼文部卿 大久保内務卿九州出張のため、二月十四日さらに内務卿を兼ねる)

(9) 伊東祐磨

児玉申立通弁之者之儀言上⁽¹⁾

岩倉殿江集会 ウエルニー氏来訪、

日進修覆之事申談 志方熊本行⁽²⁾

之事言上

十九日 参 出 俸金受取

横須賀使差出す、修覆之事兵部迄

○大坂丸・東艦、本日午後神戸出帆之電報

○内務卿午後福岡江着之電報⁽³⁾

廿日 参、出

三条殿分黒田次官之見込御布令案御差

越、異見可申旨 楠目、中島某帰国之暇

云々申聞、裁判所ニ而横須賀門番所置之

顛末等同断 ○石井諒吉、国許暴⁽⁴⁾

動二付進退之事并小拙見込等承り度

旨申聞

(1) 児玉利国(二月四日海軍大秘書となる)

(2) 志方之勝(東京府大属 旧熊本藩士)

(3) 大久保利通

(4) 海軍少丞 旧佐賀藩士

廿一日 山県小太郎横須賀へ帰、修覆之事申聞⁽⁵⁾

伊藤^(東)祐麿、伊藤⁽⁶⁾過日建言之末取戻之

事申聞 ○左近允隼太・山本⁽⁷⁾権兵衛、

学寮退去帰国ニ付金子借用之事頼、

三十五両借遣す

廿二日 参

海軍省へ明日海兵江申渡書付差越、

承知之旨申遣 肥前表にて戦争、

官軍大勝利、佐賀人所々遁去之旨

電報有之

廿三日 参、出省 雨 ○⁽⁹⁾

廿四日 出省

○三条殿江罷出、伊東江参軍被仰付へき

儀内達

廿五日 参、出省

(5) 海軍主船大属

(6) 伊藤雋吉

(7) 海軍兵学寮生徒 旧鹿兒島藩士

(8) 同右

(9) 二月二十四日条「三条殿」以下の文が二十三日であることを示すか

(10) 伊東祐麿（二月二十二日征討参軍となる）

伊東氏参軍被仰付候旨、且同人江表

向御達可相成儀申談、赤松其他同

断 ○矢折某

大六悴

廿七日⁽¹⁾ 参、出

児玉利国、台湾江明日出帆暇乞

惣督宮明後日御出發之御達有之⁽²⁾

津田真一郎、台湾之御所分内々承度

旨也

廿八日 参

溝口八十郎、一翁、悴⁽³⁾學費之事申談、

同氏江申談、三百円借用いたし置

三月一日 離宮江参向

東伏見宮様西討惣督御出發、肥前人

降伏之模様之旨電報 三条殿江参

(1) 二十六日は欠

(2) 東伏見宮嘉彰親王

(3) 「會計荒増」は小鹿とするが、「一翁悴」(大久保三郎米國留學中)の可能性もあり

上、借坐敷之事其他言上 相原安二郎

支那談品川^(カ)の一封参、地所之儀申越 遠武

より来状

○栃木県貫属田部井金一郎江六両遣す

二日 参、出

三日 参、

陸軍省江出、台湾之事承る、大隈氏

同道 小島中陰事

四日 参、

森憲正、五両遣す ○榎本武揚

より六日中村楼江招対之書翰

一翁江木戸氏之口上、娼妓并遊園之儀

申遣

五日 参、

三条殿文通、明日可参旨、台湾之事也

(4) 品川忠道(上海領事)か

○払郎人クロツク、海上信号和解差出杯之事申聞

○榎本江ラツコ二枚信太江頼之分遣す

六日

三条江罷出 ○⁽²⁾印入

玉忠・永峯、鳥井之事其他申聞

七日 参、出

林大佐長崎へ出候書状入手 大森帰府

三浦十郎江五拾両借遣す⁽³⁾

卯三郎方江行く

八日 出省

法郎人クロツツ江預り置候書付類返遣

有馬・谷元・大久保、調度課見込書持参、

赤松江渡置く

九日 参宮⁽⁴⁾

(1) クロツツ(仏国公使館付海軍士官)

(2) 三月五日条に書かれる二つの項目が六日の記事であることを示すか

(3) 旧佐土原藩士前年十月ドイツ留学より帰国

(4) 大久保忠尚(海軍主計少監)か

無事 榎本本日横浜迄出立⁽⁵⁾ 吉井江

行、出立跡ニ而口上申置

十日 参、出

和蘭御あつらゐ船取極之事、条公・大隈

氏相談、取極可申旨赤松江談置

鹿児島県士榎並利勝、拾両遣す

十一日

伏見⁽⁶⁾宮様御使 吉井友実⁽⁵⁾手紙、発

帆之事并久光殿云々之事等⁽⁷⁾

高島、屋敷之事聞合頼 卯三郎、地所

之事談 酒匂屋、大六江之手紙渡す⁽⁸⁾

十二日 参。出

電報、島初七名鹿兒島ニ而捕縛ニ成⁽⁹⁾

候旨 ○川田熙⁽¹⁰⁾、海陸取建之取調^(河)

陸軍太輔⁽¹¹⁾分申来候旨并確堂殿衆⁽¹²⁾

(5) 吉井友実(三月七日宮内少輔を辞す)

(6) 貞愛親王

(7) 島津久光(二月二十日より鹿兒島にあり)

(8) 坂川屋(千住の青物商)か

(9) 島義勇(佐賀の乱首謀者 三月七日捕縛)

(10) 河田熙(徳川宗家家扶 旧静岡藩少参事)

(11) 西郷従道

(12) 松平確堂(旧津山藩主)

議御断之事等依頼 肥田(1)国貞

廉平之事頼越

十三日 参、出

国貞之事木戸氏江内話、村田・杉浦内務(2)

大丞江頼遣す

十四日 出、参

十五日 参

岩倉殿(3) 華鳥宮并伏見宮御子様海

軍省江御入学被遊へく候旨御談并堤殿(4)

同断、外二静寛院宮御附被仰付候

静岡之者等之事御談、此儀御向江談

す

十六日

兵学寮江行く、中牟田・佐々倉江岩倉

殿御談之事申聞

(1) 旧山口藩士

七月内務省七等出仕
となる

(2) 杉浦譲

(3) 華頂宮博経親
王(アメリカ海軍兵
学校に入学するも明
治五年帰国、四月二
日より海軍兵学寮へ
随意通学)

(4) 堤雅長(華族
五月海軍兵学寮へ入
学)

溝口八十郎、昨日岩倉殿御談之儀申聞

十七日 参

川村少輔帰府、鹿児島之情実を聞く、

省内之事肥田事等相談

リセンドル方江行く、甲比丹⁽⁵⁾
(チキママ) 氏二面会

秋田県石塚致次江五両遣す

十八日 参

条公、奈良原江逢可申旨御談⁽⁶⁾

卯三郎、小曾根村地所一見之上取極

可申話す

十九日 参、出 俸金受取

永峯、梅成頼卷物持参⁽⁷⁾

廿日 参、出

大坂丸帰帆 唯武連正院江差出、佐賀長

崎之事共御話申させ置 嘉納、尚齒会

(5) ル・ジャンドル
(外務省准二等出仕)

(6) 奈良原繁(二月島津宗家家令となる)

(7) 中井梅成

之事来月十一日ニ致可申旨談

才助出立ニ付拾五兩 水重^(端枝)江拾三兩遣す

梶婆々江廿五兩遣す

廿一日

村田巳三郎 高島五郎

廿二日 参

奈良原・海江田を訪ふ、従二位殿の事

内話有之、御使之人物内話

廿三日 参 雨雪

卯三郎

廿四日 参

林大佐長崎へ帰府、事情を申す、且長

崎稲佐地所魯人云々之事申聞

長谷川、桜井同断帰府届

廿五日 参

村岡大尉、海軍募兵之事徳田大尉

口上申聞

廿六日 三井ちりめむ御差越預置

条公山岡江添宮内太輔鹿兒島江

被差候旨申来る

廿七日 参

高島從⁽⁴⁾侍明日出立ニ付、内務卿江御書

取、東伏見宮様同行 川村公台湾

行之人数書来る 卯三郎

廿八日 雨 不快断

林大佐、台湾行被仰付度旨 ○⁽⁶⁾

廿九日 同断 終日雨

○人見勝太郎

三十日 参 鈴木隠居病死

西郷台湾行之御評議有之⁽⁷⁾

(1) 村岡道純（海軍水兵本部歩兵科副長、海軍大尉）

(2) 三井高福（八郎右衛門 三井惣領家当主）

(3) 万里小路博房

(4) 高島鞆之助（佐賀表へ出張）

(5) 木戸孝允

(6) 三月二十九日条「人見勝太郎」が二十八日の記事であることを示すか

(7) 西郷従道

三十一日 参 出省

四月一日

稻葉⁽¹⁾元兵部少輔江行く、浅野・織田⁽²⁾同道、

故陸軍之事并軍制改革之事を問ふ、

不分明

二日 参

梅成、村山民部死去ニ付十両并同人

江五両遣す

三井八郎右衛門江鴈一番遣す

三日 離宮江参

卯三郎、地所之事申聞 有馬純武

四日 参 卯三郎江地所断申遣す

川村江⁽³⁾赤松武官兼勤之事申遣、

同人方江行、林西行之事其他談す、不承知

嘉納二郎作

(1) 稻葉正邦（三

島神社大宮司兼権大
教正 もと老中）

(2) 織田泉之か

(3) 赤松則良（こ

の日海軍少将兼海軍
大丞に、翌日台湾蕃
地事務参軍となる）

遠武分伝信、江藤已下三日高知にて縛
せられ候旨申越

五日 参

大隈・西郷分五時集会之事申越

六日

川田熙 中村雇外国人居館之事相談

延遼館集会

遠武秀行西国分帰府、種々事情申

聞、明日参官、三条殿御初江言上可致旨
申談す

七日 参

村上江十五両、お花江拾両遣す 福田鳴

鷺、三十両渡す 尚齒会目録

八日 参。出

織田、種物蒔き附け頼 卯三郎、金借用

(4) 江藤新平(三月二十九日捕縛)

(5) 大隈重信(四月五日台湾蕃地事務局長官となる)

(6) 西郷従道(四月四日台湾蕃地事務局督となる)

(7) 中村正直

(8) 織田賢司(開拓使十等出仕もと海軍奉行並)か

之事申聞 松平勘太郎⁽¹⁾ 杉浦江酒井之事

頼状認遣す 木村二梅

九日 参

西郷、日進艦江乗組之由ニ而参官、万

注意之事申談す

瑞穂卯三郎、四百両用立

十日 参

昨夜神田婆々病死之旨申来

十一日

嘉納方ニ而尚齒会、老人多勢来

十二日 参

トーマスヲルスより使船之事 仏郎西⁽²⁾

士官クロツツ宮本江引合可申旨談す⁽³⁾

玉忠江行 古庄嘉門

肥田々、ウエルニー申出之箇条許可致

(1) この年内務省
八等出仕となる

(2) トーマス・ウ
オルシュ(米人貿易
商 ジョンの兄)
(3) 宮本小一(外
務大丞)

哉調印いたし呉候様申越

十三日 御断申上

肥田使江調印之上帳面返却

嘉納二郎作

十四日 参

岩倉江罷出、船行違之事御談、黒田

次官尽力ニ而相済

十五日 参

溝口 田付駒太郎⁽⁴⁾ 永峯弥吉

十六日

中村敬太郎、金子之事頼申聞く

十七日 参

吹上御庭江罷出

十八日 参

川村、種々相談有之、撰挙之事申談

(4) 田付駒次郎(旧
静岡藩用人並)か

三条殿并外務省江行く、台湾

一件二附而也 外国人之郵便書状

来る 古庄嘉門 遠武秀行

十九日 参

外山捨八父、⁽¹⁾ 悴之礼申聞ル

台湾事件、米公使分申立有之不都合二付、

北海丸出帆御差留

村田内務大丞、木戸⁽²⁾ 参議御退職二付方

向如何可致哉之相談 中村之金子申遣

廿日 参

北海丸長崎江向出帆、伊東分伝信有之、

不日帰帆之旨

廿一日

中村敬太郎江五百両渡す

伊東分伝信、近々帰帆之旨、長崎ニ春日・東

(1) 外山節翁（もと歩兵差図役）

(2) 木戸孝允（四月十八日辞表を提出）

滞船之旨同断

英教師サットン氏⁽³⁾分生徒居所之儀ニ付
書付差出す、川村江相渡す置

廿二日 参

木村二梅 沢太郎左衛門、花鳥宮様^(華頂)

御勉励之旨并堤殿之事申談す

木平・中村分千五百両拝借之証書受取

廿三日 参 大風雨

瑞穂屋卯三郎、七百両借遣す

廿四日 参

安岡金馬・新宮二郎江拾両遣す、同人

之事伊集院江談す 筑波艦稽古

之儀、真田を以而少⁽⁴⁾輔江申遣

岩倉殿江花鳥宮御事并堤殿之事申^(華頂)

○大隈・西郷分伝信、東艦滞船之事申越

(3) 海軍兵学寮ダ
グラス教師団の一人

(4) 川村純義

廿五日 参

東伏見宮并内務卿参朝、肥前之

御所置言上 大六、過日隠居之

吹聴

廿六日

桐野氏、七尾製造所之事申聞

廿七日 参

久光殿左大臣被任 ○川村江生徒運用稽

古之事并台湾出船之事其他談す

三条殿江罷出、台湾出船達之事ニ付愚存

申述并木戸氏之事等

英教師サットン氏

廿八日 参。出

長崎江内務卿出張之事御決定

川村分主船寮之儀肥田江万御委任

(1) 嘉彰親王（大

久保とともに佐賀の

乱征討から帰京）

(2) 大久保利通

(3) 桐野利邦（海
軍主船中師）

(4) 島津久光（四
月二十一日上京）

之書付箇条相談有之、可然と云

廿九日 参

内務卿長崎出張 条公・岩公江一身
之進退且朝廷御微力輕挙有之

間敷儀申す

三十日 参

川村少輔、御用召御断之旨申聞

大黒屋六兵衛、材木取調在高帳持

参、直二肥田江遣す

五月一日

吉田大蔵少丞(5)、ニールルク船断相済候旨

申聞手紙差越

伊東少将・武遠(遠武)、台湾之事不可然旨

申聞、川村先等分其儘可然と云

武庫正之人相談

(5) 吉田二郎

二日 参

川勝⁽¹⁾広道、陸軍省六ヶ敷儀申聞、津田⁽²⁾

江大低^(抵)不服之旨、直⁽³⁾兩大臣殿江御内話

いたし置

三日 参 ○⁽⁴⁾

大原景賛^(カ)、五兩遣す 田原陶猗⁽⁵⁾、

同人之事黒田次官江内話す

四日 参

○大六^六忬・玉忠、石壺ッ庭江持越

織田

五日 参

祐助江百五十兩遣す分家内江渡

置

五日⁽⁶⁾ 参

西郷より之伝報、出船之旨申越

(1) 陸軍少佐

(2) 津田出(陸軍大輔兼陸軍少将)

(3) 三条実美と岩倉具視

(4) 五月四日条「大六忬」の記事が三日にあたることを示すか

(5) もと海軍六等出仕 明治六年十一月辞職

(6) 五日の日付が重複して記される

クラーク氏、写絵之事申聞

六日

大久保氏長崎へ申越候台湾地之事ニ付会

議、参朝 川村江昨夜之電

報并クラーク氏写し絵之事申遣

森憲正江五両遣す

七日 参朝

愚存書三大臣殿江差出

米公使対談書大木氏より廻来

八日 所労御断申上

大風雨終日 卯三郎、米価騰貴、

下民難渋之旨話す

九日 参

川村、台湾之事不服辞職申上

米価之事ニ付建議、大蔵内務

(7) 三条実美・岩

倉具視・島津久光

(8) ビンガム

江御談有之

十日 参

台湾彼是之論紛々、一書を作りて

国家之乱勢を申す

十一日

条公今大坂丸出帆之儀再々御使 川

村江行く、同人所存を申、辞表之儀

申聞 兵学寮ニ而クラーク写絵

十二日 参 出

毛利恭助 有地品之允・唯武連

来訪 都督并局長江兵権御任せ

之申立 川村辞表差出候旨申越

十三日

朝今出省ニ付参朝御断、石川島情実

一新之御届差出

(1) 西郷従道
(2) 大隈重信

英教師ジョ⁽³⁾ン并蘭教師コーニク氏

来訪 ○大久保の電報、大坂丸長崎

江差遣不及、同所ニ而船買入、西郷十五日頃

出帆之旨申来る并今四時帰府出帆共

十四日 出省

真木、北海行之儀ニ付心得方申談并電

信寮青森箱館間測量之事等

十五日 参

吉井工部大丞 吉田⁽⁴⁾ (アキママ) 形勢之儀ニ付出問

内務卿帰着 織田賢司、近々北

地出立之旨

十六日 伊東海軍少将

高島眉山 岩倉殿の英人ドン氏、

海陸軍之儀見込書一見として差越

台湾児玉利国の来翰

(3) ジョンズ(海軍兵学寮ダグラス教師団の一人)

(4) 吉井正澄

十七日 参

唯氏、海軍省并小倉忠正之事談す⁽¹⁾

十八日 参 俸金受取

昨朝、三好宗左衛門孫来る

福田鳴鷺 瑞穂屋卯三郎 福田

より古器物預り

十九日 出省

伊集院已下江談し、少輔引籠⁽²⁾

中省内之事務取扱取極

伊勢佐太郎米国分御召帰中ニ而⁽³⁾

帰府届 肥田、江川英武之儀申聞⁽⁴⁾

十八日、長谷川貞雄アイロンデユック江頼

置⁽⁵⁾両人之事ニ付申談

廿日 出省

三吉正一江、伊藤工部卿江之紹介認遣⁽⁶⁾⁽⁷⁾^(紹)

(1) 二月海軍中秘書となる

(2) 川村純義

(3) 横井左平太(横井小楠の甥 米国留学から帰国)

(4) もと韭山県知事 米国留学中

(5) 平野為信と甲賀信郎(英艦アイアンデューク号に再び乗船、渡英)

(6) 旧岩国藩士

海舟の紹介で工部省修技学校へ入学の

ち電信技術者

(7) 伊藤博文

卯三郎、畑山江辞書之事頼遣す

大黒屋六兵衛

廿一日

高畠眉山 岩倉殿江ドン氏之書付

返上 木平讓・木村江五百両之書付、⁽⁸⁾

大黒屋分可受取分認渡す、大六方江

家内一統被呼参る

廿二日 参朝

海軍省当分改革之儀申述置

廿三日 出省 毛利恭助、旧知事用立金之事申聞⁽⁹⁾

山田国二郎、伊勢佐太郎之事申聞⁽¹⁰⁾ 河野

左門、出身頼遣す

廿四日 参 溝口江毛利氏之内話申聞

兼兄金八江拾両遣す

廿五日 出省

(8) 中村(正直)の誤記か

(9) 徳川家達

(10) 河野通和(もと歩兵奉行)

小倉武正⁽¹⁾、対州江参り候ニ付心得方荒

増申聞る 川村純義、辞職之事速

に取計可呉旨申聞

三条殿江罷出、久光公官員黜涉之事

并其他御見込之儀御内話、右撈取不申

内は参朝無之旨也、尽力之様御頼ミ

廿六日

肥田浜五郎、アイロンデユック之儀ニ付申談并

富士山艦腐損之旨教師江内話頼候事共

○大島友之允⁽²⁾、朝鮮之儀見込并外務省

之手段ニ而は無覚束旨内話

○小曾根震太郎⁽³⁾、唐津石炭御払之事願

○小田均一郎⁽³⁾、華族会議云々

○大木参議、当節久光公并内務卿引入

大混乱相成申等之如何之相談密議

(1) 小倉忠正の誤
記か 五月二十六日
対州表へ出張

(2) 大島正朝（も
と外務省七等出仕
旧厳原藩士）

(3) 旧松江藩士
この頃仏国留学から
帰国か

有之 塩田三郎 本多来訪⁽⁴⁾

廿七日 参朝

伊東江、横須賀トック江英艦入替之儀

申遣、同人来訪

三条殿集会、島津公上言之儀ニ付紛

紜、各見込御尋

廿八日 出

島津公江行き御趣意相伺、総而一笑に

附、平心を以而御話申延

皇宮御誕辰ニ付、離宮江参上

鳴鷺江式百円用立

廿九日 参朝

熊谷県士建言之儀ニ付、斎藤其外

一名

藤沼、金子之事并松平太郎江託候地所

(4) 本多晋か

一堂殿江さし出之事并静岡学校器

械代価引受之事等申談

英人ゼームス氏⁽¹⁾ 唯武連、省内

改革之事申聞、可然と云、同省改革

書付来る、調印返却

三十日 参朝

内務卿を訪ふ、当節之議論可忍旨

を云ふ 大木氏を訪、愚見を述ふ

三十一日 出省

卯三郎⁽³⁾ 古庄嘉門 学寮生徒三

人 海江田江刀為持遣す

六月一日

高島眉山 春日艦長井上良馨⁽⁴⁾

小曾根震太郎⁽⁵⁾ 石炭御払之儀二付石井江

一封認遣す

(1) ジェームス

(2) 大久保利通

(3) 五月三日司法
省七等出仕となる

(4) 海軍少佐

(5) 石井諷吉か

二日 参

三条殿、参朝可致旨御申越、久

光并内務卿及大隈氏之進退之儀

御相談

村田氏寿

三日 参

伊勢佐太郎 沢江⁽⁶⁾一封認遣す

四日 参

海軍大中尉の人、仁礼氏⁽⁷⁾を以て局長江

御選挙相願旨申聞

肥田、横須賀ニ而紛紜之儀申聞、大木氏

江内話いたし置 肥後人平井某江

拾両遣す

五日 出省

英公使々、澳公使々之届物海図一箱

(6) 沢太郎左衛門

(7) 仁礼景範(五月二十四日シナ海巡航より帰国)

差越 米国倅方一封省江頼

六日

肥田、永島之儀内談可致旨申遣す

七日

参 支那松村⁽¹⁾・谷元⁽¹⁾来翰

八日

参并出省

高木三郎⁽²⁾分洋書二冊差越

肥田浜五郎、永島之一件神奈川裁判所江

熟談之处、内裁之都合ニ参不申旨

二付、省江相談之上、司法省江可出旨申談

浜口儀兵衛 ○昨日嘉納次郎作来

る、材木之事申談 玉忠

九日 参

山岡氏

十日 参

洋人内地旅行之会議

(1) 松村淳蔵(海軍中佐)

(2) 前年十二月サ
ンフランシスコ在勤
副領事となる

赤松より一封来る、台湾之情実

也 学士原田、兵学寮ニ而中

牟田氏と教師折合之儀ニ付申聞

十一日

石坂周造、遠州秋葉山材木之事申聞⁽³⁾

海江田武次 村田氏寿

英教師、語学教師之談有之、中牟

田氏不取扱之儀相話す

十二日 参、出省

沢江教師申聞之旨相談、石原教師⁽⁴⁾

之書翰持参、教師江も沢江談候旨

申遣置 小林向春より金子之事申越

十三日

毛利氏、クラーク氏器械之儀ニ付田中江

之一封認渡す ○海軍省江、英

(3) 実業家 もと浪士組取締役

(4) 石原勇五郎(海軍兵学寮十二等出仕)か

公使今届越候箱一ツ、横浜商人某之

書翰一封為持遣す

十四日 参

卯三郎

十五日

地租二ヶ所之分相納 北沢正誠、古⁽¹⁾₍₂₎

佐久間之手簡集一帖借遣す⁽²⁾

大隈氏江行く、当節之進退今少々考

熟之御工夫可然と云

十六日

大久保一翁、埋葬地之事并ホフマン⁽³⁾

氏之事等談有之

三条殿今明九時内地旅行評義

二付罷出候様使 高島眉山

十七日 参 俸金受取

(1) 左院五等議官

佐久間象山門下

(2) 佐久間象山

(3) 東京医学校教師

三条殿ニ而内地旅行之評議有之

久光殿・大久保氏出勤

十八日 参

外国人内地旅行之事、諸省皆不可

を云、廟議大二困却

十九日 参

石坂周造、遠州之山御買上之事申聞

海江田ハナ刀代百三拾両来る

廿日 参

本日、外国人内地旅行談判断之旨ニ而

大木・小拙外務省江立合、談甚困難

英人サトウハナ面会之申越

廿一日

⁽⁴⁾三島教部大丞、久光公之事并海江

田・奈良原両氏之事等内頼

(4) 三島通庸

サトウ氏、内地旅行難議之事内話

いたし置 川村元啓十郎・川村勇⁽¹⁾⁽²⁾

父子 木平江大六之手紙渡遣、⁽³⁾

五百両渡呉候様申遣候分也

教師今来翰、横須賀規則之事と云

廿二日 参

三島之内話内務卿江相談

原田、教師之書翰持参、医師某之

事也と云

廿三日 出省 赤松今来翰

教師今申立之医師御雇之事并語学

教師家之事等、佐々倉申談

松村・谷本支那今帰府、同国之模様ヲ聞

く

廿四日 参

(1) 川村正平(恵

十郎 内務省十等出

仕)

(2) 五月に米国留

学から帰国

(3) 木平讓(六月

十八日東京府十等出

仕となる)

廿五日 参 津田真一⁽⁴⁾ 大新娘

兵学寮江医師之事申遣 谷少将⁽⁵⁾

台湾後之所置二付、条公江集会

英サトウ夕明日来訪之事申越

廿六日

中尾捨吉、陸軍省之事申談

英国サトウ、内地旅行之儀二付内話

廿七日 参

玉忠、坐敷之事申聞、牡丹金具持参

○高島屋嘉右衛門・中野左五郎・四海屋、⁽⁶⁾

蒸気機械之事并船々之事談す

廿八日 出省

サトウ夕、明日公使并水師提督兵学

寮江罷越候旨申来る

廿九日 参 出省

(4) 津田真道

(5) 谷干城(陸軍少将、台湾蕃地事務参軍)

(6) 横浜の実業家

条公より久光公之儀ニ付御内話有之

兵学寮ニ而英之水師提督并公使

に面会、公使今内地旅行之儀ニ付条

公江伝言有之、内実之情意相談

三十日 参

条公江、昨日英公使江之内談申延、大

久保・寺島両氏江も同断

佐々倉、英国医師之儀ニ付一書認渡す

七月一日

嘉納・大六、材木之事申聞、井上如水

福田江行

二日 参

三日 参 ○⁽¹⁾

台湾跡々之御所置評義、不決

四日 参

(1) 六月四日条「蝦夷地」以下の文が三日に当たることを示すか

昨日サトウ氏来訪、内地旅行之義ニ付、

公使より之口上有之、両大臣公并寺島

江内話す ○蝦夷地真木少将々来

翰、大臣殿御初江御見せ申上

五日 参

台湾後之会議有之

六日

山田^②少将、陸軍之儀内話 伊東^藤工部卿、

台湾并跡々之内話

七日 出省

条公江、海軍士官江予備見込之事并船

御買入之事、蕃地御所分之事等申上、

省江御出ニ而同断之儀御談、両艦出帆

之事御談有之

教師江、医師頼入之事、語学教師之

(2) 七月五日司法
大輔を兼任

事等申談 中牟田江、宮様御稽古之⁽¹⁾

儀、旧徳島世子同断之事等申談⁽²⁾

伊集院江見込之事其他内談

八日 参官御断 佐々木高行⁽³⁾ 山田少将

九日 参

予備之御内示受 東艦出帆之達有

之と云

十日 参

東艦・龍驤出帆之儀ニ付愚存申述、一体

不堪任、軍権他江被仰付へく、其他強而

申述、伊集院江右等内話、両艦出帆

可致旨相談、近日台湾之儀支那

政府との談判ニ付、過日来之内見込

条公江申述

一昨宮内省分上布二反被下賜

(1) 稠宮威仁親王
(のち有栖川宮 七月十三日海軍兵學寮に入学)

(2) 蜂須賀茂韶を
さすか ただし英国
留學中

(3) 左院副議長

鍋島⁽⁴⁾四郎 中尾捨吉、奉職成難き

旨申聞 前田⁽⁵⁾医官 昨日山岡氏、

静寛院宮様御着之旨申聞并宮様⁽⁷⁾

海軍御稽古之事等

十一日 参

支那関係之衆議并柳原方江遣⁽⁸⁾

人物之事其他

十二日 参

英領事本野⁽⁹⁾今立替金之書付到来、

省江廻置 大久保内務卿江、海軍省

伊知地氏江御任可然、小拙力不及旨⁽¹⁰⁾

申談

十三日 出、参

川村江出勤可致旨申聞 伊集院・仁礼

両氏江、此頃之形勢とても小拙にては号令

無覚束旨申聞

(4) 鍋島直暲(白石鍋島氏 佐賀の乱で自邸を総督府本営に提供)

(5) 前田獻吉(前年米国留学から帰国、七月七日海軍軍医寮七等出仕となる)

(6) 七月八日京都より東京に着

(7) 威仁親王

(8) 柳原前光(駐清特命全權公使)

(9) 本野盛亨(駐英公使館一等書記官)

(10) 伊地知正治(左院議長)

条公々、久光公当節十計尽果候間、何とか

工夫可有之哉之旨被仰聞

学問師匠渡辺老人江式拾両遣す

英国サトウ氏、内地旅行之事ニ付内話

有之

十四日 参

増田某 毛利氏、海軍稽古願之事申聞

前田謙吉^(患)、御雇医英人一名之事并

アンデルソン氏⁽¹⁾申立候儀申聞

十五日 参

津田生之事東京府江頼可申旨、岩⁽²⁾

倉殿々文通

十六日

グルービュス氏、近々帰国ニ付暇乞并

本邦歴史編集之積之由にて、万

(1) アンダーソン
(海軍軍医寮教師)

(2) 津田仙(旧幕
臣の農学者 佐野常
民に随行し渡欧、帰
国)

不了解之儀出問并書類国元江

送呉候様被願

十七日 出省并参朝 俸渡

川村少輔本日出勤 岩倉殿江

津田生之事并一翁より申越候儀演

舌 アンデルソン氏、病者并医官

雇入并ペルセル氏之儀申聞

ホース氏・ワクマン氏⁽³⁾、内地江旅行之儀

ニ付種々申聞

十八日 滝村江貳拾五両借遣

長谷川貞雄、国元江参り度申聞

十九日 出省

条公江罷出、山県陸軍卿江準備之儀

ニ付可談旨ニ付、省ニ而相談、川村も

同断、内海一見之積相極

(3) ワークマン(ジ
ヤーナリスト、画家)

町田実一江、支那江参候ニ付談遣す、地所

御買揚之趣意申聞せ

毛利恭助

二十日 不快断

条公分軍務局江山県・川村両人

出席之義御達之旨有之

英国人、吉田清成之手紙持参

石原、教師分筑波艦修覆ケ所書付

持参

廿一日

大久保一翁、税之事并福岡之事、津田

八等出仕申付候事等談有之并外国公

使館地稅之事等 向山 服部 松平

玉忠 卯三郎

高木三郎・富田鉄之助米国分帰府、

(1) 海軍中主計

(2) 大蔵少輔

(3) 福岡孝弟(七月十二日一等議官を辞す)か

(4) 津田仙(七月二十八日内務省勸業寮雇となる)

暫時之御暇也と云 古庄嘉門、明後日帰

国之旨申聞

廿二日

不参朝 岩公江御役御免之儀申立

英会社ボムカンポの頭某、海軍省御

用達いたし度旨申聞

廿三日 不参

御印形廻章大木公到来 柳原手紙、

岩公公廻る

海軍省江英会社之書状為持遣す

并教師御雇之名之事石原迄申遣

富田禎二郎、⁽⁵⁾ 開拓使江出度旨

サトウ氏来訪

廿四日 不快御断

九鬼隆一、⁽⁶⁾ 出版免許之則并学校定

(5) 旧山口藩士
この年英国留学から
帰国

(6) 四月十日文部
少丞となる

割其他之事申聞 宮路・山高江

天艸人沈物取揚之事ニ付一封認遣

廿五日 同断

莊村省三、伊勢佐太郎の義申聞

廿六日

毛利恭助、旧知事県江差出置金子

之事申聞 肥田、昨日帰府之旨、船

々御修覆金別途被受取段相談

条公の伝言相廻、支那兵隊を以而我

兵を追之儀決定之旨也、過日大隈

証金六百万両を以而兵隊引揚之儀

建言之処、今此伝報あり、朝議悉く

反す、此後如何不可測

廿七日

大六隠居 高島五郎 正院今柳原

(1) 三条美美付属
偵員 横井小楠門下

公使御呈之来翰一封廻り、寺島江廻達

廿八日

高島眉山

伊東之手紙持参、元徳山藩某

廿九日

大黒屋隠居

村田氏寿 末川⁽²⁾文通 伊沢向邸

之直代申越、直ニ伊東江遣す

大木司法卿、此程より乱勢内話有之

高木三郎

三十日

条公江罷出、内務卿台湾所置として

支那行之事御衆議、愚存之条々

申述

三十一日

伊東少将出艦暇乞 富田鉄之助⁽³⁾

松岡万・同紋九郎⁽⁴⁾

(2) 末川久敬(海軍武庫司七等出仕)

(3) 伊東祐磨(八月一日龍驤艦にて渡清)

(4) 松岡運九郎(旧静岡藩開墾掛製塩方取締)か

八月一日 参朝

当月初旬、無雨、此日雨終日

二日 参朝

蕃地之事務、陸軍協議之御内達

有之

三日 参朝

志方⁽¹⁾之勝 卯三郎 準備之御内達

四日 参朝

林清康、台地之時情を聞く、形勢

内話 石坂周造、英商同道、逢

断申聞る

五日 参内 唯⁽²⁾三橋取用之事申越

上諭、台地之事漸く平穩ニ可到と雖、

此之變難計、各協力可致旨

立花⁽³⁾從五位

(1) 三月東京府から正院八等出仕に転ず

(2) 三橋富太郎か

(3) 立花寛治(四月從五位に叙せらる)

六日

内務卿支那行ニ付、築地迄暇乞として

行く 伊集院国許江可遣本日

出船之積、彼国兵撰其他之事也

七日

参朝

戸塚文海・石上昇級之事申聞

八日

参朝

教師ドーガラス(5)来翰、昨夜英水夫

一名俄ニ病死之旨也 片岡健吉、

病氣ニ付辞職願差出

九日

断

肥田、横須賀之生徒并仏人之事談

并会計之転末承る

川村(7)昨日之御内達書付并赤松之書状

差越、書状を直ニ大隈江為持遣す

(4) 大久保利通(八月一日全権弁理大臣として清国派遣を命ぜらる)

(5) ダグラス

(6) 海軍中佐 八月二十二日依願免官

(7) 川村純義(八月五日海軍中将兼海軍大輔となる)

十日 参朝

提督府之事并ニ御詔船願之事、準備金之

事等、大隈・黒田⁽¹⁾・伊地知江相談

米公使并デヨ子ラール某吹上江御招ニ付⁽³⁾

罷出、明日同公使海軍省江来るへき約

十一日

樋渡五助已下四名、支那之事ニ付趣意⁽⁵⁾

申聞、承届之段相答

巡查兩人 兵学寮ニ而米公使

并海軍會計官某ニ面会、来朝之転⁽⁶⁾

末并ミニストル之書状受取、佐々倉江

申聞、肥田江米人之伝言申遣

十二日 参朝

樋口已下之趣意、両大臣殿江申達置、⁽⁷⁾

準備金并御船御詔之事等申上

(1) 黒田清隆(八月二日参議兼開拓長官となる)

(2) 伊地知正治(八月二日参議兼左院議長となる)

(3) ビンガム

(4) マヤルス(アメリカ陸軍代将)

(5) 旧鹿兒島藩士前名八兵衛

(6) パートン(アメリカ海軍主計官海軍會計学舎教師となる)

(7) 樋渡の誤記か

上村已下之事川村江談す、同人江申聞置⁽⁸⁾

十三日 参朝

米国会計士官頼ミ之事、提督府鹿

児島江先差置事等、川村江談

富田・高木之内一人海軍会計伝習

江加度旨、川村申越

鹿児島県士四人、支那と戦争之儀二付

所存申聞、両大臣殿御内話致置

十四日 参朝御断

米国献上之砲試験、浜御庭江出勤

十五日 参朝 両日大暑八十八度

十六日

中尾捨吉、蟻川之事申聞、岡部一郎之事

頼遣す 戸塚文海・石神昇級之事二付、

川村江一封認渡す 樋渡五助

(8) 上村正之丞
まは彦之丞(ともに
海軍兵学寮生徒)か

(9) 蟻川直方(賢
之助 海軍武庫司大
令史 もと兵部権大
丞 佐久間象山門
下)か

岡崎恵備枝、五両遣す

十七日 参朝

石神・戸塚、前田謙吉(1)之儀ニ付建言(献)

十八日 所劳断

川村・仁礼、石神已下建言之事并

石原生・上村已下之事等談す

玉忠江家作代百両渡す

十九日 参朝

男谷々竹田於やま病死之為知有之

廿日 参朝

英国公使、一等書記官ブランケット氏同

道、引合せ種々談有之 樋渡之同志

五名、三条殿江罷出候旨申聞

榎本六兵衛々五百両受取

廿一日

(1) 八月五日海軍
軍医寮六等出仕とな
る

樋渡五介同志之者^(助)大臣殿江罷出候申訳、

御内々被成下度旨相頼ミ

高畠眉山

廿二日 参朝

川村・松村来、勘定方士官頼ミ之事、英

教師江相話之旨申聞、且鉄艦之儀二付

申談、石原之事教師附申附候旨

樋渡申聞候儀、三条殿江申上

本蔵江六百両遣す

廿三日 参 朝小雨、近日旱

大石円、国元権令之事申聞、奈良原江頼候旨也

小田切綱一⁽⁵⁾ 天野才助、船江乗組度旨

矢附藤輔⁽⁶⁾

廿四日 参朝 雨有り冷氣

中尾捨吉、徴兵某之事申通呉候趣

(2) 三条実美

(3) バートン

(4) 旧高知藩士

(5) 小田切綱一郎
(もと静岡学問所三等教授)

(6) 八月二十四日
条「矢作藤作」と同
一人か

矢作藤作

廿五日 参朝

伊勢燠、閑散之御場所江軫度旨

廿六日

長谷川貞雄、會計官俸金之内六分一献

納之願書持参

米国天文学士ワッセル氏、外山之書状持参、

金星測量之為支那地方江渡ると云

塩田三郎 富田貞二郎、^(勳)歛業寮江出度

旨

廿七日 参朝

東艦長崎ニ於て廿一日暴風ニ而破損、

少尉⁽¹⁾宮路静来告く ○長谷川已下

之願書大臣殿江差出 小森沢、⁽²⁾横須賀

門番之事ニ付内史左院江相談之旨申聞

(1) 宮地静太(海軍少尉補)

(2) 小森沢長政(七月二十七日海軍秘書官となる)

教師、英水夫不行跡ニ付暇之事申出、

今一度免呉候様返事遣す

廿八日 不参

三条殿御初江、東艦之儀ニ付台罪書差出、^(侍)

同省略人減之御相談 大木江行く、趣意

及内話

廿九日 断

人減之儀ニ付愚存申上、内史迄差出 条公

今東艦之儀ニ付て遠慮ニ不及候旨御申

越 教師、水夫不行跡ニ付御暇

被遣へく候旨、過日之厚意相謝す

三十日

条公今甲鉄艦御買入之旨申来る、代価貳百

六拾万弗と云

三十一日 不参

教師申立候水夫暇之事、兵学寮江申遣

○東艦浮き候由伝信有之

津田真一

九月一日 不参

後藤象二郎、田安名前ニ而蓬萊社

より五六万両借用申込有り、小拙承知

之旨承候如何哉と、^因□未夕話無之旨

答ふ 村山淳徳、出身之事申聞

二日 不参

伊藤江行、退職御聞済相成候様依頼

す

三日

肥田浜五郎、横須賀ニ而御雇⁽³⁾人某病死

ニ付手当之儀申聞

田安附水野全・石坂、後藤蓬萊社江金

(1) 明治六年政変
で下野

(2) 伊藤博文か

(3) エリクソン（横
須賀造船所雇 七月
横須賀で没）か

子借用之事ニ付段々之話承ハル

四日

大木氏条公御使、御人減其他之儀ニ付縷々

相談す 石坂、水野全之手紙持参、蓬

萊社ニ而金子借用之談

津田仙 米人某、鉄艦之事申談

五日

条公江罷出、出勤可致旨也、当節之御所

置不然旨申す 島津氏を訪ふ、奈

良原江段々所存相話す

六日

山岡、金谷組徴兵之儀ニ付沸騰すと聞く

学生上村今一人乗組之事申聞

梅沢・関口⁽⁴⁾ 富田鉄之助国元へ帰府

七日

(4) 関口隆吉(山形県権令もと精鋭隊頭取)か

山岡、金谷之事岩倉江申立相済可申

旨

八日

石井小丞^④、海軍省切迫之勢困却之旨

山岡、岩倉殿へ出勤可致旨口上

人見

九日

一翁三条殿御使、出勤之御催促

石坂頼二付、後藤江金子之事二付

一封認遣す

奈良原江一書遣す、愚論二葉遣

十日

志方之勝 山岡岩倉公使、出勤可致

旨

十一日

村田氏寿 水野全、蓬萊舎金子

借用之事ニ付故障出来云々歎願

十二日

益田^④長雄 富田禎次郎、出身之事并

金子借用いたし度旨申聞

十三日 東嵐

秋田県士族高垣^①尚志、無理ニ差置参候様

申談

十四日

左大臣殿江罷出、近日之事愚存申上^②

十五日

浜口儀兵衛

十六日

敦賀県桑島信夫、拾両遣す 福田分

尚齒会寄合書一幅矢之根石一箱来

(1) 十月十四日国
事建白を政府へ提出

(2) 島津久光

十七日

福田鳴鷺 高木三郎

富田禎二郎、拾五両遣す

十八日

俸金受取

十九日

廿日

大木江行き、辞職之事相済候様頼

海江田江薩主先代之履歴書借用

相頼む 玉忠江百両家代遣す

廿一日

旧大島甲斐守娘⁽¹⁾

廿二日

梶田生之願之儀ニ付仁礼江一封認遣す⁽²⁾

廿三日

米国分便有之、金子之事申越

吉沢八郎外二人⁽³⁾ ○大久保一翁、三条殿分

(1) 大島義彬(もと書院番頭)

(2) 梶田敬与(静岡県士族 家禄奉還と海軍編入を願ひ出る)か

(3) 吉沢六郎(明治五年八月五日条参照)と同一人か

出勤可致旨御使

廿四日

水野全、石坂ハ証書返却之旨申聞

廿五日

佐々木高行江赴キ、元織田某之儀談

曾谷(4)玄成英国(言)ハ帰府 高島眉山

廿六日

条江罷出、西郷江御文通之事申述(5)

田安江水野全之事談す

廿七日

廿八日

廿九日

石原勇五郎、教師書翰持参 昨日富

田鉄之助江、倅方江遣し候式百円之儀

相頼ミ

三十日

支那米国在留公使横滨江来る

(4) もと静岡学問
所五等教授 宮崎立
元の実弟 英国留学
から帰国
(5) 西郷隆盛か

十月一日

赤松則良台地へ帰府、情実を聞く

石原勇五郎、教師之書翰持参

二日 疋田隠居病死

三日

曾谷江塩田之一封認遣す 杉浦誠、

箱館へ出府之旨

四日

五日

堤雅君⁽¹⁾、留学之事申聞

六日

佐治某、陸軍省大将之事話有之、

西郷⁽²⁾ニあらされは不可然と答

七日

英教師、支那之事如何可成哉之旨申聞

(1) 堤雅長か

(2) 西郷隆盛

八日

昨夜英水夫小頭築地ニ而疵受候旨、

教師(3)ハ書翰有之、返答申聞、ヲーストン

氏使

吉田清貫、清国(3)ハ歸リニ付来る

九日

伊集院兼寛、薩摩(3)ハ歸府ニ付来る

佐治某

十日

肥田浜五郎、ウエルニ放逐之事川村談候旨

英人サトウ氏

十一日

川島醇(4)、独逸江明日出立之旨并飯塚廉(5)

作之事申聞 人見勝太郎

伊知地季繩(6)、薩摩(6)ハ歸府之旨

(3) アストン（イギリス公使館通訳生）

(4) 河島醇（三月ドイツ留学より帰国後外務省へ出仕、ドイツ公使館勤務となる）

(5) 飯塚年整（東京府十一等出仕）

(6) 海軍武庫司権中令史

十二日

大久保一翁、大木氏と談有之、愚二成候而
今一応出勤可申旨也

十三日

卯三郎

十四日

吉田清貫、明日支那江出立之暇乞

大久保一翁が軍医寮之医員東京

府採用いたし度内掛合、戸塚江参りに

遣し否可申旨返答 井芹景七建言

十五日

男谷背虫江三両遣す

十六日

十七日

井芹景七、唯氏江招介一封認遣す^(絶)

溝口、水野江三位殿へ三百両遣し度

旨二付、同人江一封認遣す

十八日

小笠原敬翁 大木・土方江行く、皆他行

十九日

人見 安井畑蔵江一封認遣す

水野全江三位殿へ被下金三百両渡す

戸塚文海、医官東京府江差出候事断

度旨申聞 富田鉄之助

廿日

深山宇平太 安岡金馬、世人小拙

之進退二付悪評有之旨申聞

土方大内史、辞表今少々見合可申旨

廿一日

益満休之助小兒病死之旨、茶善婆々々

(1) 土方久元（正院大内史）

(2) 安井定保（海軍省主船助）

(3) 薩摩藩士 慶應四年上野戦争で死去

申来る 増田⁽¹⁾席之助

廿二日

曾谷^(書)元成

廿三日

岩倉⁽²⁾殿御奥方病死之旨為知有之

平山⁽³⁾太郎

廿四日

廿五日

岩倉殿江使差出

廿六日

村田氏寿⁽⁴⁾ ヲロス⁽⁴⁾ノ書状、二見昇

持参 石原教師⁽⁴⁾ノ被招

廿七日

井上如水 肥田浜五郎

廿八日

(1) 増田明道

(2) 岩倉具視夫人
誠子 十月十四日死
去

(3) 海軍省十等出
仕 この年米国留学
から帰国

(4) ウォルシュ

深山宇平太、書付持参 人見勝太郎

廿九日 神田好平(孝) 松木謙三之建言差越

三十日

竹添真一郎(進) 富田貞二郎(次) 深山之

事、長谷川迄申遣す

卅一日

松木之建白大木氏江為持遣

十月一日(6)

柴誠一(7) 倅準一家督之礼、柿田杏庵

同道 福田鳴鷺(8) 亀井茲福(カ)

二日

条公ハ支那之儀隠密ニ可致御達書

三日

志方之勝九州辺江行くニ付、西郷江一(9)

封認渡す

(5) 旧熊本藩士

(6) 十一月の誤記か

(7) 柴貞邦（海軍少佐 もと軍艦頭八月一日死去）子息準一はのち海軍兵学校を出て海軍中佐となる

(8) 亀井茲監（旧津和野藩知事）か

(9) 西郷隆盛か

四日

浅野・神保来訪

吉井幸輔去廿九日米国へ帰朝⁽¹⁾

五日

六日 用度課へ月給可渡旨申越

七日

八日 三条殿、支那安穩ニ談候旨申来る

木梨精一郎、支那之儀ニ付見込申聞⁽²⁾

九日

昨日伊集院兼寛へ小子見込平穩⁽³⁾

二相成御飲之旨申越

十日 俸金受取

他行

十一日

十二日

(1) 吉井友実

(2) 内務省七等出仕

(3) 十一月五日海軍少将兼海軍少輔となる

唯江頼遣候井芹生十四等出仕被申付

御旨、唯氏今申越

十三日

松平⁽⁴⁾安倫・^(康)確堂殿、御当主外国行暇乞

村田巳三郎 富田鉄之助

十四日

大六隠居

十五日

高木三郎暇乞 石坂周蔵

十六日

米国江届物富田・高木江頼遣す

織田⁽⁶⁾信之蝦地今帰府二付来訪

海江田武次 富田⁽⁷⁾鉄之助暇乞 大久保

一翁方江一封認遣す

十七日

(4) 確堂の四男
この年米国留学
(5) 松平康倫

(6) 陸軍武庫司十
四等出仕
(7) この月米国へ
帰任のため離日

十八日

一昨日差越候教師書翰稽古船之

儀二付、石原勇五郎来話

川村⁽¹⁾十四日二歸府と云

肥田江ウエルニ江出す条約下案返却

十九日

藤母江八両遣す 中尾・南部⁽²⁾両

氏

廿日

安岡金馬

廿一日

高島眉山

廿二日

堀基⁽³⁾

廿三日

(1) 川村純義(十月十九日より九州へ出征)

(2) 南部広矛(一月静岡県参事を免ぜられ大蔵省検査助に転ず)か

(3) 開拓少判官

加納二郎作 肥田江家作代十六兩為

持遣す

廿四日

溝口八十郎、大沢之事申聞⁽⁴⁾

廿五日

廿六日

エル子ストサトウ氏、地税并国民富有
之事業を談す

明日大久保参議於正院復命之事申来

廿七日

大久保弁理大臣着船上陸之旨、史官⁽⁵⁾分

申越

兵頭正億、税法并治法を談す⁽⁶⁾

廿九日

増田長雄 南部、税法之事を聞く

(4) 「会計荒増」は大沢勝利とあり

(5) 大久保利通（この日清国から台湾經由で横浜着）

(6) 兵頭正懿の誤記か 兵頭は七月長崎県参事を免官 原本はこの行で改頁され二十八日が欠落

三十日 嘉納二郎作

十二月一日

福田鳴鷺、元紀州邸借遣す致約

毛利恭助 木村霞宿分返金之断

二日 ○風雨⁽¹⁾

三日 ○

川村太輔、出勤可有旨申聞

四日

奈良原繁、久光公御進退二付段々

内話

有之、所存申述

五日 俸金受取

立花四位⁽²⁾ 木村芥舟

六日

向山黄村 井上如水 杉宮内少輔江一⁽³⁾

封認遣す 塩田三郎、是迄之進退

(1) 「風雨」が十二月三日条であることを示すか

(2) 立花鑑寛(十二月二十八日寛治へ家督を譲り隠居)

(3) 杉孫七郎

大意内話す 鳴鷺、今日赤坂邸

内江引移る 扱所江断置

七日

津田真道

八日

明九日金星太陽經過天覽二付^(太)

参宮之様申来る 高畠、山口之事

并市ヶ谷地所之儀頼申聞る

九日

肥田浜五郎 本日金星太陽經

過を見る 伊集院兼寛、

小拙進退并趣意之大略を話

十日

梅成、金子之事申聞

十一日

梅成江五拾両遣す 中村敬太郎今二ヶ

月分五十両預り置 ⁽¹⁾元竹元隼人、

博覧会江出役いたし度旨頼 ⁽²⁾兵頭

正毅 大久保一翁

十二日

白峰駿馬 ⁽³⁾管林三
千屋虎之助、米国帰府

之旨ニ而来る、海軍省之荒増申聞

十三日

町田江竹本之頼一封遣す、福田江渡ス ⁽⁴⁾

大久保公江申上候旨ニ而一封差越、

返事遣す

十四日

十五日

竹本要斎、町田江一封認渡す

十六日

(1) 竹本要斎(隼人正 もと外国奉行陶芸家)

(2) 正懿の誤記か

(3) 菅野覚兵衛(海舟門下 もと海援隊士 米国留学から帰国)

(4) 町田久成(十二月四日フィラデルフィア万博事務局長となる)

尾寄三郎⁽⁵⁾・兵頭、終日談す

十七日 俸金受取

東京府江執事召出、白川県石井平太金子

遣すの事糺し有之 毛利恭助

奈良真志米国⁽⁶⁾へ帰府二付来る

ヘーヤ使鈴木静輔 竹本⁽⁷⁾へ使

十八日

十九日

廿日

廿一日

藤三郎⁽⁸⁾

廿二日

毛利恭助、明日静岡江出立之旨、且

藤沼・梅沢之内出役之事申聞

廿三日

(5) 左院四等議官
もと三条実美家人

前名戸田雅楽 明治
六年米英留学から帰
国

(6) 旧盛岡藩士
米国留学から帰国

(7) もと海軍兵学
寮教師 明治六年退
職

(8) 北山藤三郎か

○⁽¹⁾⁽²⁾小林寅 白峰駿馬 唯武連介

申通金子百五十両借用申度旨

廿四日

○

廿五日

唯江九拾両借遣す 大久保一翁、

条公之御沙汰ニ而小拙再退職願

不差出候様との事申聞 ⁽³⁾岩崎

豊之事頼む

廿六日

明日西郷従道帰府奏聞被聞召

候ニ付出仕之様申来る ○昨日中尾

捨吉建言草稿見せらる

廿七日

浜口儀兵衛 武庫司江一封認遣す

(1) 小林と白峰の名が十二月二十四日条であることを示すか

(2) 小林虎三郎(旧長岡藩士 佐久間象山門下)か

(3) 旧豊岡藩権大参事 この後東京府十一等出仕となる

山本江五両遣す

廿八日 毛利、出立之暇乞

廿九日 玉屋忠、大黒屋江口上申遣

三十日

尾寄三郎、書籍館之話有之、承知

いたし遣す 肥田浜五郎

三十一日

溝口江三万六千両之事并大六之金子

猶予之事并書籍館出金之事等

談す 大六分利金納む、一万五千

五百両之利千百三十三両徳川家江納む

大六江千住坂川屋江口入之三百万返

却いたし遣す

八年

一月一日

村田氏寿、小拙進退二付鹿兒島県人

心附候哉之者有之趣内話有之

学士モルリー⁽¹⁾

二日

福島中佐⁽²⁾ 石川桜所⁽³⁾ 高畠眉山

福田鳴鷺 山寺 水野全 人見

三日

来客、別帖有之

四日

浅野二郎八

五日

海軍教師夫婦

六日

七日

八日

九日

(1) モルリーか

(2) 福島敬典(海軍中佐)

(3) 石川良信(陸軍一等軍医正もと幕府奥医師)

十日 兵頭 伊勢

十一日

岩田通徳⁽⁴⁾ 英人ホース

十二日

十三日

白峰駿馬 古庄嘉門、竹添之事

申聞

十四日

本寿院殿七十之御賀ニ付認差進⁽⁵⁾

十五日

尾寄三郎、書籍館之談有之、承知

致す 卯三郎百両持参并跡々

之金子書物ニ而可納旨談す

十六日

十七日

(4) 式部寮権大属

(5) 第十三代將軍
徳川家定の生母

伊勢燠、同県士仲田某之事頼申聞

十八日

尾寄三郎、華族方書籍館之儀ニ付

同道、鉾山寮之建家一件

伊藤博文江行く、不在

十九日

伊藤参議、鉾山寮之建物旧知事江

払下ケ之事相談承知之旨、本日大坂

江出張ニ付、帰府猶相談之旨返答有之

溝口江、三位殿ハ華族書籍館江献金

貳千円書物千部可相納旨相談

英人サトウ氏⁽¹⁾、来月頃本国江帰国ニ付、

アストン氏跡引受居ニ付可問尋問、

不相替談可呉旨被申聞

大迫静岡権令、同県之事共話承る

国 (1) 二月に賜暇帰

廿日

尾寄三郎、同人江華族書籍館建設之儀

二付一書を差出す、尤同人頼也

仲田某 玉忠、大六江預ケ金貳千両

返却、受取置 杉浦勝雅

廿一日

大久保一翁、華族館地所之事、其外杉浦⁽²⁾

勝雅悻之事頼

織田氏⁽³⁾

廿二日

人見、御下ケ金証書之事申聞、溝口江可談

趣返答 卯三郎、書目持参

廿三日

用度課今月給可致旨達書

西郷陸軍太輔分書通、海軍省江遣

(2) 杉浦耕成（勝雅の養子 東京府官吏で画家 高陽と号す）
(3) 織田泉之か

す、但酒錢料渡方之事

廿四日 雪終日

溝口、人見其他江証書之金高拝借

之事談有之、趣意内話

廿五日 大久保一翁

廿六日

塩田三郎⁽¹⁾ 志方之勝
大久保忠尚

廿七日

尾寄三郎

廿八日

廿九日

林清康、海軍省之内話

卅日

増田長雄、竹添之事申聞、内田

之事頼遣す

(1) 前年八月海軍
主計大監となる

卅一日

奈良真志、国許江帰り候旨 兵頭、種々
談有之

二月一日

吉田清貫、国許江出立之旨、西郷・桐⁽²⁾
野江趣意内話可致旨也

二日

三日

四日

小笠原敬翁子息内務省江十五等⁽³⁾
出仕被仰付旨

五日

石原勇五郎、教師之使として来る

六日

大風 厳寒
小野友五郎⁽⁴⁾、華族鉄道建築名代

(2) 桐野利秋（もと陸軍少将 西郷隆盛とともに下野、鹿児島へ帰郷）

(3) 小笠原信学

(4) 工部省鉄道寮七等出仕 もと軍艦頭取、勘定奉行並

人之相談、肥田可然と答

七日 嚴寒

人見勝太郎、七千両御向方相渡候旨申聞、

猶所存申聞せ置 肥田浜五郎、小野

氏江内話之事談す

華族会館分⁽¹⁾たいご忠順、三位殿納

金納書之返書持参

八日 水衛江十^(瑞枝)両遣す

九日 藤・梅吉暇差出引取

横井民也、魯行之事申聞⁽²⁾

十日

向山黄村・岩田半太郎、黄村江陶器⁽³⁾

釈迦之像借す

十一日

竹本要斎、身分之事頼ミ 奥田久馬⁽⁴⁾

(1) もと侍従 華族会館副館長

(2) 新潟県士族 この年ロシア軍艦に乗船、帰国

(3) 岩田通徳

(4) 東京裁判所十
二等出仕 のち大蔵
省に勤務

太出身之事、高崎⁽⁵⁾五六江一封遣す

十二日

水戸人越前人兩人来 安岡金馬、

金子借用いたし度旨申聞 唯武連、

御用達金九拾円操替借可遣旨申

聞せ置

十三日

卯三郎、書物之事申談、拾円持参

十四日

木村霞宿 伊勢煥⁽⁶⁾ 宮崎元立、^(立元)

一昨日病死之為知

小鹿村甚太郎の書状、大屋村并其外之取立⁽⁸⁾

米払代金近日之内可差越旨

十五日

長沢常山、在附方懇願 福田⁽⁷⁾

皇女御命名之節献上物代料一人⁽⁸⁾

(5) 左院二等議官

(6) 二月十二日死去

(7) 前年一月静岡
県権参事を免官

(8) 梅宮薫子内親
王(明治天皇第二皇
女 一月二十一日誕生)

七両七十三錢二厘之旨、用度課分申来

十六日 大風

奈良真志、海軍省九等出仕被申付旨

児玉利国

十七日

十八日
々々々

土方大内史江話、再辞表差出 町田久成

分竹本要斎江附シ御返書来る

小鹿村甚太郎分米払代金、大谷村分

六石六斗、壺斗三升替五十円七十六

錢九リ弍毛、回金分利米代二十七円七リ、

七リ弍毛以郵便届来る 用度課分俸

金可渡旨申越

十八日

十九日

卯三郎、書目帳持参 小森沢長政、

小笠原長好採用之事申聞、長沢常山
之事頼遣す

廿日

廿一日 終日大雪

廿二日

アストン来る、廿六日兵隊引払ニ付横浜江
招対^(待)いたし度旨 安岡金馬

廿三日

廿四日

廿五日

小笠原長功、海軍省十二等被命候旨申越

英公使館アストン江廿六日招対之断申入

廿六日

中村敬介、一二両月分五十両持参

(1) 小笠原長功(海軍省十二等出仕)か

(2) 中村正直

竹本要斎 曾谷元成、同人外務

省江出候旨申聞

廿七日 雪

廿八日 唯今返金七八日猶予之事申来

三月一日

竹本要斎 妻木頼矩⁽¹⁾ 中村秋香⁽²⁾

二日

俸金百六十六錢余受取、昨日可

渡間執事可差出旨用度課申越

浅野二郎八

三日

四日

五日

土方大内史、種々内話 奈良原氏、

左府公江形勢二付御進退之事⁽³⁾

(1) 旧静岡藩権大参事

(2) 教部中録もと静岡学問所調役歌人

(3) 島津久光

相談す 尾寄三郎 坂井生 東

京府知事江一封認遣

六日

竹本要齋 兵頭并福島県参⁽⁴⁾

事某

米人クラーク氏、帰国ニ付暇乞、中村同道にて来訪、欧州江廻り帰郷と云

七日

八日

溝口八十郎、徳川家戊辰已来之転末書

小拙姓名ニ而夫々可相記旨達有之由、

瑞穂屋之書籍千両之上今百両中村

返金ニ而相払可申旨話置

九日

玉屋忠次郎、大黒方預ケ金之内千両

(4) 山吉盛典(福島県参事)

持参并張秋穀屏風一双差越、

是者三百両之代りニ取寄置呉候

様申聞 高島眉山

十日

瑞穂屋々洋書来る 木村芥舟

福田鳴鷺、同人々唐屏風返却

十一日

村田氏寿、内田之事頼む 古庄嘉

門 神崎正誼、活字之成るを以て

其良否を世に問ハむとすと云

十二日

溝口江屏風之事書籍之事談す

十三日

小笠原敬翁、長好出仕之礼申聞

神崎正誼、活字引札認遣す 長寄三郎⁽³⁾

(1) 清代の画家

(2) 大蔵省紙幣寮勤務を経て活字製造業を起こす

(3) 尾崎三良の誤記か

十四日

十五日

津田真道 卯三郎、書目持参 石原

勇五郎、外務江出度旨

石坂周造江託せし米国の届物⁽⁴⁾

一箱到来

十六日 雨

肥田浜五郎、ウエルニー一件ニ付当惑之旨

申聞并取扱出来難之由

十七日 俸金百六十六両ヨ受取

十八日

卯三郎江百両渡す

十九日

竹本要斎 志方氏

廿日

米⁽⁴⁾ 前年十一月渡

山本
七兵衛
三十両
遣

廿一日	雨	杉田 ⁽¹⁾ 小田均一郎、繁沢生之事頼 ⁽²⁾
廿二日	〃	徳川家江西洋書渡す
廿三日		
廿四日	浜口儀兵衛	内田今日御用召之旨
廿五日		
廿六日	お信縁付二付五十両遣	
廿七日	雨	
廿八日	尾寄三郎	高畠眉山、本二冊 借遣す
廿九日		
三十日	お花江拾両遣す	
三十一日		
四月一日		
二日		

(1) 杉田玄端か
(2) 旧松江藩士
これより先仏国留学
から帰国か

駒井竹所

三日

四日

五日

駒井竹所 御向江書籍不残相送る

六日

三位殿明後日頃御上京之旨⁽³⁾

七日

八日

尾寄三郎 織田賢司

九日

十日

十一日

尾寄三郎、竹添之事内話、山寺

江託増田江一封、竹添之事申遣⁽⁴⁾

(3) 徳川美賀子か

(4) 増田長雄

十二日

溝口之勝^(勝之)、大六方金子之事并跡

々納め方之事、自分趣意等内話

赤松良則^(則良)、湯治江罷越候旨 笹間某、

静家禄奉還地渡方六ヶ敷旨

申聞 海軍省々魯国公使榎

本之書翰通覧之為差越、西郷氏

江順達

十三日

石橋介、明日箱館江出立之暇乞

最上五郎⁽¹⁾、近々弘郎西江罷越候旨

十四日

浅野二郎八 増田長雄、竹添之事談

津田真道

十五日

(1) 明治六年米国留学から帰国、この年マルセイユ領事館勤務のため渡仏

玉忠を預り之千両滝村江渡并中村

納金之事元紀邸屋賃之事等内話

置 河野通和、昨左院御廢非役

相成候旨ニ而歎願書持参

十六日

津田真一郎 増田長雄

十七日 俸金受取

古庄嘉門、竹添之事談 浜口儀兵衛

十八日

大久保一翁、三条殿より元老院江被仰付

へく旨ニ而品々御口上有之

糟屋⁽²⁾隠居、元筑後守

十九日

最上五郎、払郎江出發暇乞 塩田三郎、

魯国江出立ニ付暇乞

(2) 糟屋義明(筑後守もと外国奉行並)か

廿日

増田虎之助 有馬純馬⁽¹⁾

廿一日

廿二日

一翁々、元老院江被仰付へくニ付出勤之様

三条殿々御説諭有之旨申越

廿三日

海軍省江御内達正院々相廻

廿四日

昨御内達之御書付高島江託し、

伊集院江届遣す 一昨日富田鉄

之助米国々遣候、忤退寮再ひ入

校之転末手紙共同断

廿五日

元老院議官於 皇居被仰付

(1) 有馬純武の誤
記か

廿六日

伊集院江昨日拝命之事申遣 寺田⁽²⁾

剛実、同県士出身之事伊集院江頼

状認渡す 中尾捨吉 兵頭⁽³⁾

廿七日

辞表元老院議官中江託、上進頼遣

廿八日

払郎人ヂブスケ、横須賀御雇チボデ⁽⁴⁾

氏、近々帰国暇乞、種々不平申聞

廿九日

一翁今、御断申上候哉出勤哉之旨承度、

明日条公々御呼ニ付返事可遣旨申越

三十日

五月一日

二日

樋口江
三両
遣す

(2) 東京府七等出仕 旧高知藩士

(3) 三月七日司法省七等出仕となる

(4) 横須賀造船所副首長

毛利恭助 兵頭 古庄 高島

皆当節之事を云、紛々たり

三日

条公今御使として一翁子、可致出勤

旨也、御断申上呉候様頼む

四日

⁽¹⁾尾寄三郎 竹本要斎

五日

⁽²⁾宮内猪三郎、出身願度旨

六日

七日

兵頭

八日

⁽³⁾白峰駿馬、宮内猪三郎之事頼遣

九日 十日 十一日 十二日 来客逢断

(1) 四月二十日正
院六等出仕となる

(2) 新治県出身の
英学生 前年に建言
書を政府へ提出

(3) 二月二十三日
主船少匠司となる

十四日
十三日